

原 著

鈴木伸哉<sup>1</sup>・能城修一<sup>2</sup>：東京都中央区八丁堀三丁目遺跡より出土した江戸時代の木棺の形態と樹種Shinya Suzuki<sup>1</sup> and Shuichi Noshiro<sup>2</sup>: Forms and materials of wooden coffins of the Edo Period recovered from Hatchobori 3-chome Site, Chuo-ku, Tokyo

**要 旨** 東京都中央区八丁堀三丁目遺跡の17世紀前半を主体とする一般都市住民層の墓域より出土した円形木棺と方形木棺について、当時の身分・階層差の影響と、森林資源枯渇の影響を評価した。円形木棺・桶製骨蔵器484基と方形木棺41基の部材、および卒塔婆23本をあわせて1418点の樹種を同定し、木棺材の木取りおよび厚さを計測した。円形木棺・桶製骨蔵器にはサワラを中心とした材が用いられていた。方形木棺にはスギや、ヒノキ、サワラなどの材が用いられており、使用される樹種にばらつきがあることから、転用棺である可能性が高いと考えられた。こうした用材は、将軍家・大名家の墓の用材と異なっており、当時の身分差・階層差が木棺の用材に反映したと考えられる。円形木棺は、側板・底板・蓋板の各部材が時期が下るにつれて薄くなる傾向にあり、とくにサワラ製とヒノキ製の部材に著しかった。古植生の研究や文献史料研究の成果と対比すると、八丁堀三丁目遺跡より出土した17世紀前半の円形木棺・桶製骨蔵器は、おもに木曽川・天竜川流域にまともって分布するサワラなどの移入材によって製作された量産品であると想定された。また、都市における木材需要の増大による木材供給源の枯渇が、円形木棺の用材の厚さの低下および樹種の多様化に反映していると想定された。遺跡内の木製埋葬施設の間には、身分・階層差の影響は認め難いことから、八丁堀三丁目遺跡の墓域は身分制度確立の過渡期的様相を示していると考えられる。

**キーワード**：江戸、江戸時代、森林資源、身分と階層、木棺

**Abstract** This paper discusses cultural implication of tub-shaped and box-shaped wooden coffins from the Hatchobori 3-chome Site (early half of the 17th century), Chuo-ku, Tokyo. The site is a typical commoners' graveyard of the age, and the research focus was set on social hierarchy represented by the burial style. Altogether 1418 pieces of wooden artifacts from the site were identified wood anatomically. In addition, grain and thickness of the coffin boards were studied. Tub-shaped wooden coffins and tubs for cremated bones were mainly made of *Chamaecyparis pisifera*, whereas box-shaped coffins were made of *Cryptomeria japonica*, *Chamaecyparis obtusa*, and *Chamaecyparis pisifera*. The diversity of taxa suggests that those box-shaped coffins were made of used timbers. This shows clear difference from typical coffins for Shogun and Daimyo families, probably representing their social distinction. Moreover, boards of tub-shaped coffins tended to be thinner in the later age of the site, especially in those of *Chamaecyparis obtusa* and *Chamaecyparis pisifera*. According to pollen and historical records, *Chamaecyparis pisifera* probably grew in the Kiso and Tenryu valleys, and the studied coffins were considered to have been mass-produced using timbers imported from those areas. On this basis, it is assumed that eventual scarcity of trees caused by increasing demands for timbers in the city areas resulted in coffins made of thinner boards of diversified species. Absence of social hierarchy among wooden coffins at the site seemed to show a transitional phase at the beginning of the Edo period to the strict hierarchy established in the middle 17th century.

**Key Words**: Edo, Edo period, forest resource, social hierarchy, wooden coffin

## はじめに

東京都内の近世（織豊政権期と江戸時代）墓に関する考古学的調査・研究は、河越（1965）や、鈴木ほか（1967）によるものを端緒として、高度経済成長期以降の緊急発掘の増加により資料を増し、都市における葬制の歴史を明らかにしつつある。近世墓の発掘調査・研究では、寺院の移転や廃絶に伴い、墓標などの上部施設や過去帳などが散逸

していることが多い。そのため、近世墓の調査・研究では、遺体や副葬品、そして棺などの埋葬施設から、墓が作られた時期や、被葬者の年齢・性別や身分などの社会的位置を明らかにし、武士・百姓・町人といった身分や、大名・旗本・御家人といった身分内における階層をはじめとする身分制度のあり方を墓制から復原すること、また江戸においては、都市社会史の一面を読み取ることに重点が置かれて

<sup>1</sup> 〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程

Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University, 1-24-1 Toyama, Shinjuku, Tokyo 162-8644, Japan

<sup>2</sup> 〒305-8687 筑波農林研究団地内郵便局私書箱16号 森林総合研究所木材利用部

Forestry and Forest Products Research Institute, Tsukuba Norin P. O. Box 16, Ibaraki 305-8687, Japan

きた(古泉, 1987; 谷川, 1987, 1990, 1996)。谷川(1996)は埋葬施設を14種類に分け、およそ18世紀以降の江戸の墓において、遺跡ごとに埋葬施設の種類の異なることから、埋葬施設の構造と被葬者の身分・階層および寺院の格式・規模が相関するとした。

木製の埋葬施設には、円形木棺、方形木棺、桶製骨蔵器、曲物製骨蔵器がある(図1)。円形木棺は、上面観が円形またはだ円形で、結桶形の構造をなし、複数枚の板材をタガや木釘・竹釘で組み合わせた側板・底板・蓋板からなる座棺である。早桶とも呼ばれるが、専用棺と桶や樽などを転用したものとの区別が難しいため、ここでは円形木棺と呼ぶ。方形木棺は、上面観が正方形または長方形で、箱や櫃形の構造をなし、1枚または複数枚の板材を使った側板・底板・蓋板を木釘や竹釘・鉄釘やホゾなどで組み合わせて作られた座棺または寝棺である。桶製骨蔵器および曲物製骨蔵器は、それぞれ結桶や曲物製の容器に火葬骨やその一部を納めたものである。

これらの埋葬施設のうち、将軍家や大名家といった高い階層の武士身分を除く大多数の武士と、職人・商人を含む広義の町人によって構成される江戸の一般的な都市住民に江戸時代を通じて広く用いられる円形木棺については、構造と法量の研究によって、被葬者の年齢層によって大きさの異なるものが使い分けられていたことが明らかになった(鈴木, 1988, 2000; 高山, 1993; 竹内, 1993; 田口, 2001, 2002)。また、方形木棺については、17世紀の寝棺は17世紀中葉に消滅し、18世紀には平面が正方形の系譜的に異なる座棺が出現する(谷川, 1991, 1996)。しかし、これらの木棺に関する研究は、系譜や外形上の差異を中心に行われており、用いられる木材や当時の森林資源量、あるいは身分制度と用材選択との関わりを扱った研究は少ない。

これまでの調査例では、徳川将軍家や大名家の埋葬施設

と一般都市住民層のそれとでは、用いられる木材の樹種に差異が認められる。歴代将軍およびその正・側室の埋葬施設には、港区増上寺徳川将軍墓の発掘調査(鈴木ほか, 1967)によると、数重の方形木棺を用いたものが多く、樹種もヒノキを主体とし、最内棺にはキリを用いる例が多い(鈴木, 1985)。ヒノキの使用は2代将軍秀忠の墓から明治時代まで見られ、このことから将軍家の埋葬施設用材には江戸時代を通じて規格のあったことが伺える。また、池上本門寺の大名家墓所では、埋葬施設に用いられた木材は、いずれもヒノキであった(植田, 2002a)。これに対して、被葬者が一般都市住民層に比定される墓の棺材には、スギやサワラ、ヒノキが多く用いられていたが(橋本・辻本, 1990; 能城, 1995; 松葉, 2000; 植田, 2002b, 2003)、人口に対比して、一般都市住民層の墓の調査例は少なく、用材の傾向は十分に把握できていない。

これまで、円形木棺と方形木棺が出土する17世紀前半の墓域の調査例は少なく、これらを取り扱った研究もわずかであった。東京都中央区八丁堀三丁目遺跡は、第1次調査によって、17世紀前半の墓域が確認されていたが(東京都中央区教育委員会, 1988)、2001年9月から12月にかけて、400平方メートルを対象に、第2次緊急発掘調査が行われ、716基の埋葬施設を主体に、これまで資料の乏しかった江戸時代前期に比定される一般都市住民層の墓域に関わる遺構・遺物が多数出土した。出土した木棺材・卒塔婆材1418点をもとに、従来位置付けが不明確であった円形木棺と方形木棺について、幕藩体制の基礎となった身分制度の確立期(児玉, 1963)である17世紀前半当時の身分・階層差の影響と、森林資源枯渇(所, 1980; Totman, 1989)の影響を明らかにする。なお、資料および研究の一部は、第2次調査報告書(八丁堀三丁目遺跡(第2次)調査会, 2003)に公表している(蔵持・鈴木, 2003; 鈴木, 2003)。



図1 中央区八丁堀三丁目遺跡第2次調査地点出土円形木棺、方形木棺と桶製骨蔵器(八丁堀三丁目遺跡(第2次)調査会, 2003より転載)。1a: 円形木棺(180号)、1b: 方形木棺(808号)、1c: 桶製骨蔵器(297号)。

## 調査地点の概要と調査方法

## 1. 調査地点の概要

調査地点である八丁堀三丁目遺跡第2次調査地点は、東京都中央区八丁堀、北緯  $35^{\circ}40'20''$ 、東経  $139^{\circ}46'48''$  に位置する（図2）。

近世以前の遺跡周辺は、平川や利根川等によって形成された江戸前島と称される中州の一部か、または海中・河川中に没していたと推定される。徳川家康が城下町として江戸を建設した当初の八丁堀地区は寺町として形成された。調査地点は日蓮宗朗惺寺<sup>ろうせいじ</sup>に比定される。朗惺寺は天正2（1574）年八丁堀に創建されたとされるが、開基である日惺の没年が慶長3（1598）年とされることから、慶長年間（1596～1615）初期に創立した可能性が高い。寺院は明暦3（1657）年の大火によって現在の品川区に移転し、その後の当地域は八丁堀同心の居住地として江戸の町割りに組み込まれた。

## 2. 層序と年代、被葬者

調査の結果、標高  $-0.5$  m 付近に分布する焼土層の下面から716基の埋葬施設を主体とする寺院や墓地に関連する遺構・遺物を検出した（図3）。墓地関係の遺構・遺物は、概ねA～D-4グリッドを境に、埋葬施設の密集する北部と、調査区を東西方向に横切る石組列（66号）と、廃棄坑（344号）、卒塔婆集中域（72号）の分布する南部とに分かれる。

埋葬施設は標高  $-1.0$  m 付近に分布するオリブ黒色砂を主体とする盛土層を掘り込んで形成された第4面と、標

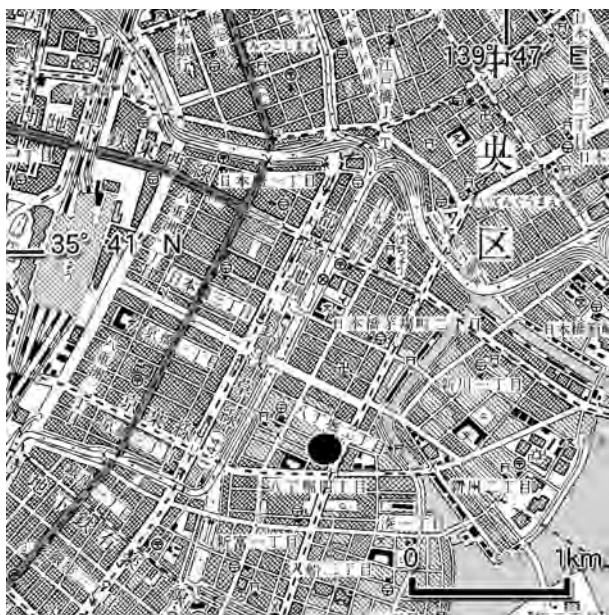


図2 中央区八丁堀三丁目遺跡第2次調査地点の位置。地形図は国土地理院発行 1:25,000「東京首部」を使用。

高  $-1.5$  m 以下に分布する黒褐色シルトを主体とする盛土層を掘り込んで形成された第5面・第6面の3面に形成されている（図4）。第4面の埋葬施設の年代は、伴出した古寛永通宝の初鑄年代（1636年）を上限と、寺院の移転した年代（1657年）を下限とした。第5・6面の埋葬施設の形成年代は不明だが、上限年代は寺院が創立したとされる16世紀末以降とした。第5・6面で伴出した銭貨は渡来銭のみからなり、古寛永通宝を伴わないことから、第6面、5面、4面の形成順序は層位と矛盾しない。したがって、これらの埋葬施設は寺院が遺跡周辺地域に存在していた16世紀末以降1657年以前に形成されたものと考えられる。

過去帳などの資料が散逸し、上部施設が削平されているため、墓域に葬られた遺体の身分・階層は明らかでない。しかし、第1次調査地点（東京都中央区教育委員会、1988）から武士と推定される俗名の刻まれた墓石が検出されたこと、また埋葬施設内の出土遺物に刀の鏝や模造刀など、武士身分のものと見られる遺物が含まれていることから、墓域には武士身分の埋葬施設が含まれていた。いっぽう、埋葬施設を持たない、いわば投げ込み同様に葬られたと見なされる人骨も見られることから、低い身分の被葬者も含んでいた。被葬者の年齢層は、0～6歳の乳幼児が、

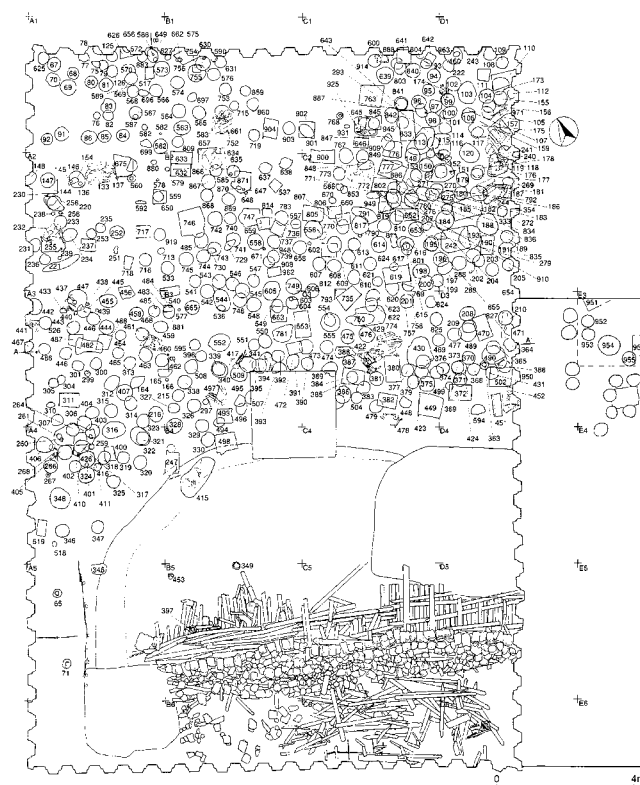


図3 中央区八丁堀三丁目遺跡第2次調査地点第4面遺構分布。八丁堀三丁目遺跡（第2次）調査会（2003）を改変。

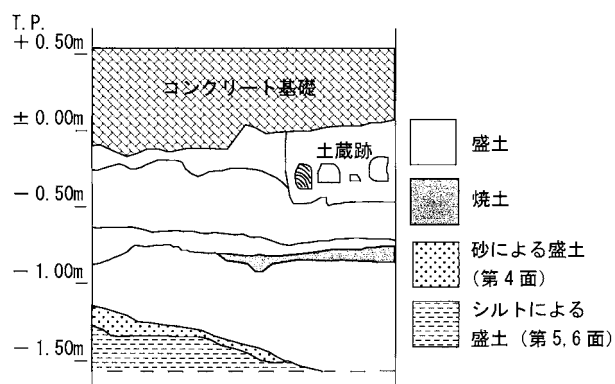


図4 中央区八丁堀三丁目遺跡第2次調査地点C-4グリッド南北分層図。八丁堀三丁目遺跡(第2次)調査会(2003)を改変。

第6面では50%弱、第5面と第4面では60%強を占める。これらの遺体は遠隔地からの搬入の痕跡はなく、いずれも、江戸城下に集められ、城の周囲を固める武家屋敷に居住した武士と、職種ごとの集住が定められた商人や職人らの一般都市住民のものと推定される。

各面からは埋葬施設およびその他の遺構が出土した(表1)。もっとも多く出土した円形木棺は、大きさは底板・側板が長さ33cm前後の小型のものと、底板が長さ51cm、側板が長さ61cm前後の大型のものの大きく2種類に分けられ、被葬者は前者には子ども、後者には成人が多い。性別による使い分けの傾向は認められない。桶製骨蔵器には、小型のものが用いられている。方形木棺は、大型の一枚板を用いたものが多い。その大きさには差異があり、被葬者の年齢層によって使い分けられている。

### 3. 資料と分析方法

これらの埋葬施設に反映する身分・階層差や、森林資源の枯渇の影響を捉えるため、木棺の種類内・種類間における用材の樹種と、製作技法の差異を検討した。円形木棺・桶製骨蔵器484基と方形木棺41基の部材、および卒塔婆23本より1418点を採取し、樹種の同定、木取りの観察、厚さの計測を行った。

円形木棺・桶製骨蔵器と方形木棺については、ひとつの木製埋葬施設より、底板・側板(方形木棺は長側板・短側板各1点)・蓋板、1枚ずつを選び、樹種同定を行った。また、円形木棺・桶製骨蔵器のひとつの側板・底板・蓋板に、複数の樹種の木材が使われている可能性を検討するため、85遺構において、側板・底板・蓋板の各部位から2点の資料を抽出し、樹種同定を行った。また、部材間の用材差を検討するため、411遺構から側板・底板各1点ずつ822資料を抽出し、同一遺構の側板と底板に用いられた木材の樹種の一致率について検討した。卒塔婆については、23点

表1 中央区八丁堀三丁目遺跡第2次調査地点出土埋葬施設

| 遺構種別     | 検出面 |     |     |
|----------|-----|-----|-----|
|          | 第6面 | 第5面 | 第4面 |
| 円形木棺     | 9   | 100 | 395 |
| 方形木棺     |     | 9   | 37  |
| 桶製骨蔵器    |     |     | 8   |
| 曲物製骨蔵器   |     | 4   | 38  |
| 骨蔵器(陶製他) |     |     | 13  |
| 火葬直葬     |     | 16  | 27  |
| 土葬直葬     | 6   | 20  | 26  |
| 石組       |     |     | 9   |

を抽出して樹種を同定した。樹種同定は木材切片のプレパラート観察により行った。プレパラートは、徒手切片によって作成した。プレパラートには標本番号CHB0001～1418を付した。これらは出土資料とともに中央区教育委員会に保管されている。

木棺材の製作過程や、容器としての密閉性・強度を捉えるため、樹種同定を行った部材の木取りと厚さを観察した。厚さの計測は、部材の側面の、節などを除いて最も厚い部分を0.1mm単位まで計測した。検出面ごとに側板・底板・蓋板の厚さの平均値を算出し、厚さを比較した。

## 結 果

### 1. 樹種同定

同定された9樹種の木材解剖学的な記載をし、同定の根拠を明らかにする。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher ヒノキ科 図5a-5c (CHB0884, 635号側板)

垂直・水平樹脂道のいずれをも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材はごく少ない。樹脂細胞が早材の終わりから晩材にかけて接線方向に散在する。仮道管の内壁にらせん肥厚は認められない。分野壁孔は中型で、孔口が縦に開くトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に2～3個。

サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endlicher ヒノキ科 図6a-6c (CHB0563, 444号底板)

ヒノキに似る針葉樹材。晩材は比較的多い。分野壁孔はやや大きく、孔口が斜めに開くヒノキ型～スギ型で、1分野に2～3個。

ネズコ *Thuja standishii* (Gord.) Carriere ヒノキ科 図7a-7c (CHB0689, 509号底板)

ヒノキに似る針葉樹材。晩材は比較的多い。分野壁孔は中型のスギ型で、1分野に2～3個。

アスナロ *Thujopsis dolabrata* (L. f.) Sieb. et Zucc. ヒノキ科 図8a-8c (CHB0548, 430号底板)

ヒノキに似る針葉樹材。晩材は少ない。分野壁孔はごく

小型のヒノキ型～スギ型で、1分野に3～5個。

スギ *Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don スギ科  
図 9a-9c (CHB0197, 190 号側板)

ヒノキに似る針葉樹材。晩材は量多く明瞭。分野壁孔は大型で孔口が水平に開くスギ型で、1分野に1～2個。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc. コウヤマキ科 図 10a-10c (CHB1199, 895 号側板)

垂直・水平樹脂道のいずれをも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は少ない。樹脂細胞はなく、仮道管の内壁にらせん肥厚は認められない。分野壁孔はごく大型で、孔口が水平に開く窓型で、1分野に1～2個。

モミ属 *Abies* マツ科 図 11a-11c (CHB1319, 540 号蓋板)

垂直・水平樹脂道のいずれをも欠く針葉樹材。ときに傷害樹脂道が認められる。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量多く明瞭。仮道管の内壁にらせん肥厚は認められない。放射組織は柔細胞のみからなり、壁は厚く、垂直壁は数珠状末端壁。分野壁孔はごく小型のスギ型で、1分野に1～4個。

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 図 12a-12c (CHB0002, 64 号底板)

垂直・水平樹脂道を持つ針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、早材は量多く明瞭。樹脂道の分泌細胞は薄壁で、ふつうは残っていない。放射仮道管の水平壁には著しい鋸歯状の突起がある。分野壁孔は大型の窓型で、1分野に1～2個。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図 13a-13c (CHB0595, 461 号底板)

ごく大型でまるい管孔が年輪のはじめに1～3列ほど並

んで孔圏をなし、晩材では小型で薄壁の管孔が火炎状に配列する環孔材。早材から晩材への移行は緩やか。木部柔組織は短接線状で、年輪の終わりで著しい。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性。

## 2. 円形木棺・桶製骨蔵器

円形木棺・桶製骨蔵器の、側板・底板・蓋板の各部材内における樹種は、73%が一致した(表2)。一致したものは、サワラが68%と最も多く、次いでスギ、ヒノキ、アスナロが2%前後を占める。一致しなかったものは、サワラとスギの併用が13%、次いでサワラとヒノキの併用が9%を占める。サワラを用いた部材は95%を占め、用材にサワラが多用されていた。スギ、ヒノキ、その他の樹種では不一致率が一致率を上回り、厳密な樹種選択は行われていなかった可能性が高い。スギとヒノキの併用のように、サワラ以外の異なった樹種同士が組み合わされている例はなく、サワラを主体として樹種が選ばれていた。

つぎに、円形木棺・桶製骨蔵器を構成する側板と底板では、318基(77%)が一致した(表2)。一致したものは、サワラ・サワラが288基(70%)と最も多く、次いでスギ・スギが24基(5%)、ヒノキ・ヒノキが4基(1%)となった。一致しなかったものは、サワラ・ヒノキ(側板・底板の一方がサワラ、もう一方がヒノキのもの)が44基(11%)と最も多く、次いでサワラ・スギが27基(7%)、サワラ・その他が14基(3%)と続く。全体として一致率は高く、各遺構の部材1点は、その他の部材の用材選択を反映している可能性が高いが、サワラ以外の樹種が出現した場合には、同一の部材にサワラが混じっている可能性も高い。

検出面ごとの用材組成について見ると、第6面の円形木

表2 中央区八丁堀三丁目遺跡第2次調査地点出土木棺部材の樹種の組み合わせ

### 円形木棺

|      |     | 部材 b |    |     |     |    |     | 底板  |    |     |     |
|------|-----|------|----|-----|-----|----|-----|-----|----|-----|-----|
|      |     | サワラ  | スギ | ヒノキ | その他 |    |     | サワラ | スギ | ヒノキ | その他 |
| 部材 a | サワラ | 58   | 11 | 8   | 4   | 側板 | サワラ | 288 | 15 | 29  | 11  |
|      | スギ  | -    | 2  |     |     |    | スギ  | 12  | 24 |     | 3   |
|      | ヒノキ | -    | -  | 1   |     |    | ヒノキ | 15  | 1  | 4   | 2   |
|      | その他 | -    | -  | -   | 1   |    | その他 | 3   | 1  | 1   | 2   |

### 方形木棺

|     |     | 短側板 |    |     |     |     |     | 底板  |    |     |     |
|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|
|     |     | サワラ | スギ | ヒノキ | その他 |     |     | サワラ | スギ | ヒノキ | その他 |
| 長側板 | サワラ |     | 1  | 1   |     | 長側板 | サワラ | 1   | 2  |     |     |
|     | スギ  | 2   | 17 |     |     |     | スギ  | 2   | 11 |     | 4   |
|     | ヒノキ |     |    | 7   |     |     | ヒノキ | 1   |    | 4   | 1   |
|     | その他 |     | 3  |     | 8   |     | その他 |     | 2  | 1   | 5   |

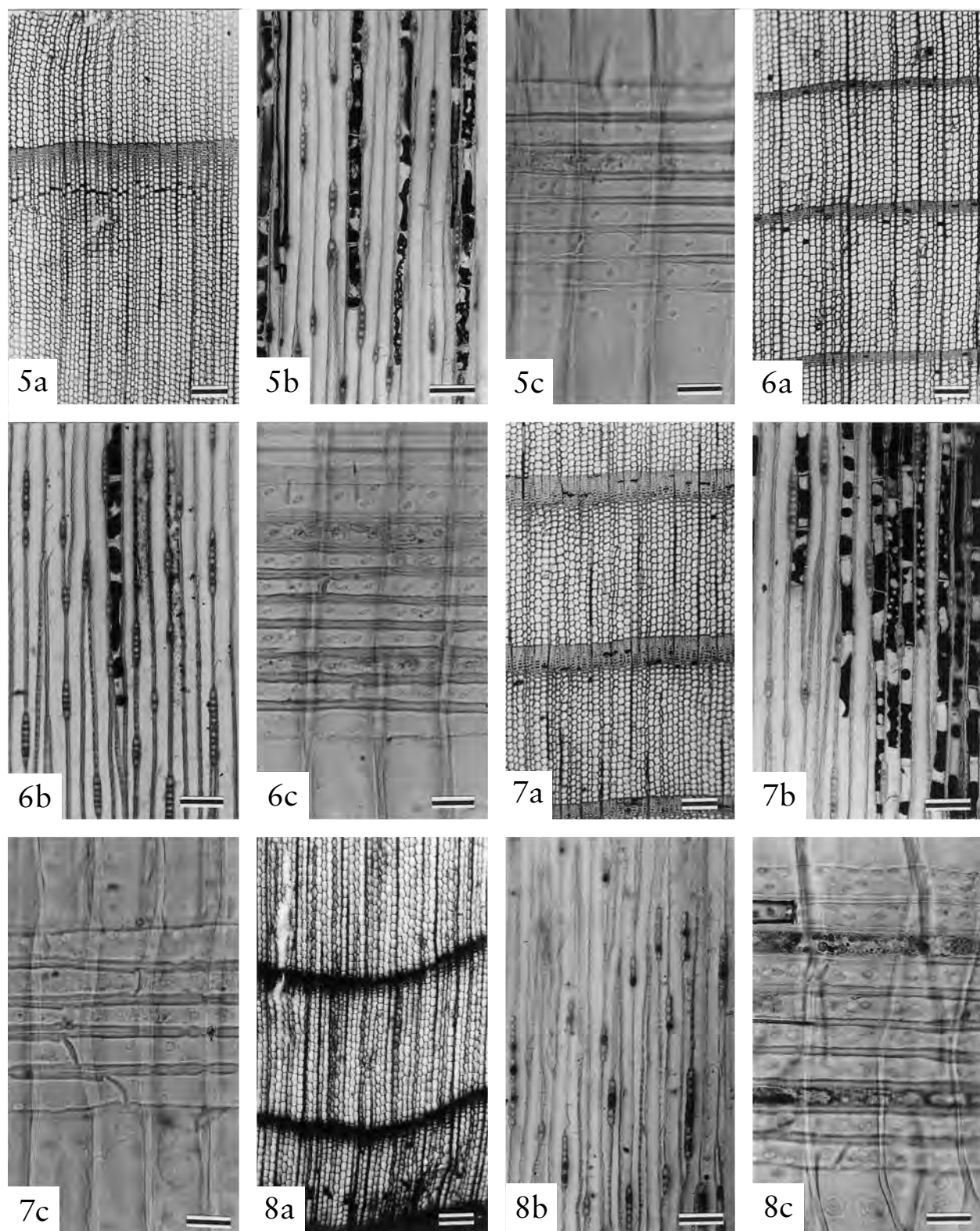


図5-8 中央区八丁堀三丁目遺跡第2次調査地点出土木材の顕微鏡写真(1). 5a-5c: ヒノキ (CHB0884, 635号側板), 6a-6c: サワラ (CHB0563, 444号底板), 7a-7c: ネズコ (CHB0689, 509号底板), 8a-8c: アスナロ (CHB0548, 430号底板). a: 横断面  $\times 30$  (スケール: 200  $\mu\text{m}$ ), b: 接線断面  $\times 75$  (スケール: 100  $\mu\text{m}$ ), c: 放射断面  $\times 300$  (スケール= 25  $\mu\text{m}$ ).



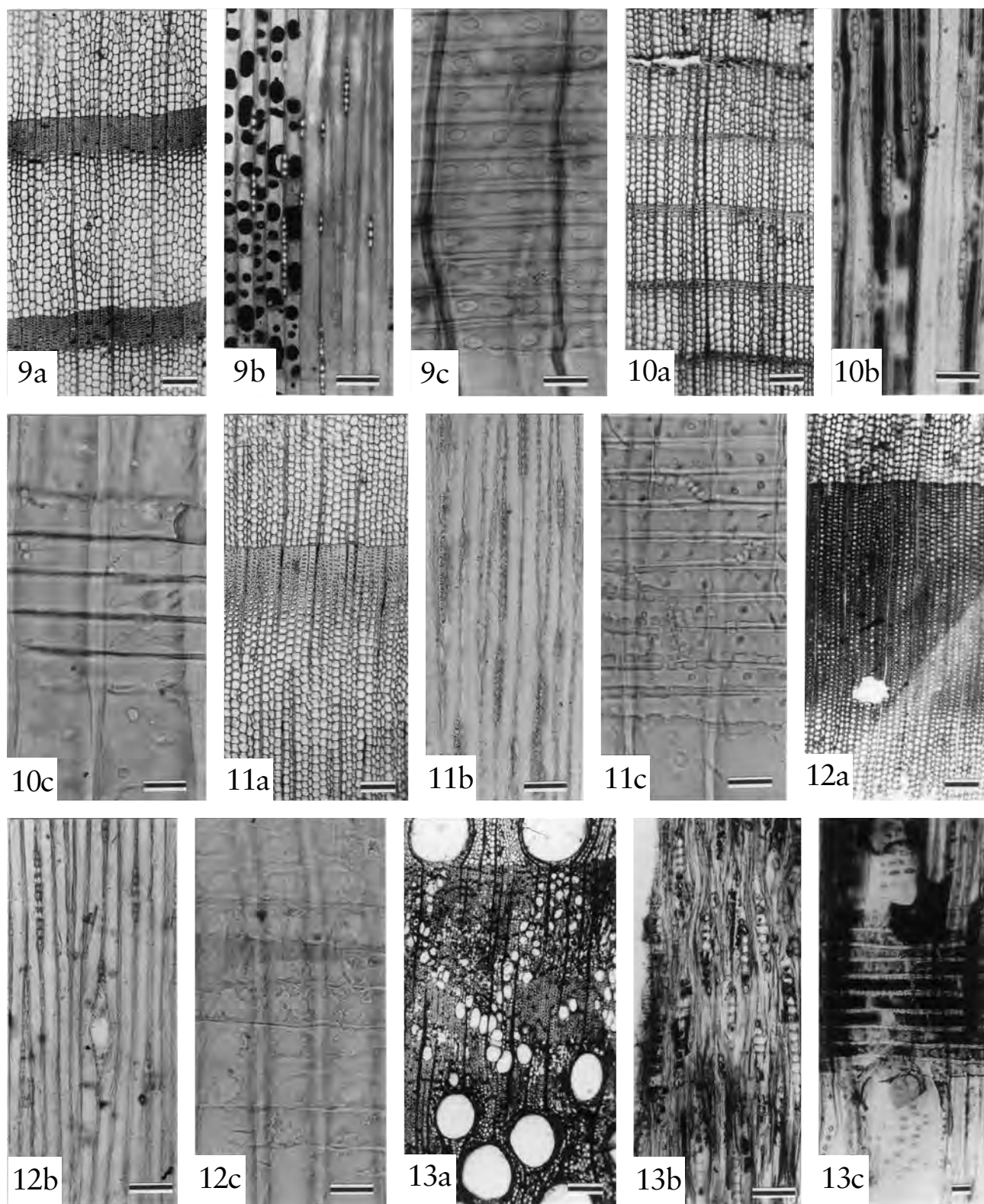


図9-13 中央区八丁堀三丁目遺跡第2次調査地点出土木材の顕微鏡写真(2)。9a-9c: スギ (CHB0197, 190号側板), 10a-10c: コウヤマキ (CHB1199, 895号側板), 11a-11c: モミ属 (CHB1319, 540号蓋板), 12a-12c: アカマツ (CHB0002, 64号底板), 13a-13c: クリ (CHB0595, 461号底板)。a: 横断面×30 (スケール: 200 μm), b: 接線断面×75 (スケール: 100 μm), c: 放射断面×300 (12c: ×150) (スケール: 25 μm)。

表3 中央区八丁堀三丁目遺跡第2次調査地点出土木棺材と卒塔婆の樹種

| 樹 種       | 円形木棺 |    |    |     |    |    |     |     |     | 桶製骨蔵器 |    |    | 方形木棺 |    |    |    |     |    |    |    | 卒塔婆 |
|-----------|------|----|----|-----|----|----|-----|-----|-----|-------|----|----|------|----|----|----|-----|----|----|----|-----|
|           | 第6面  |    |    | 第5面 |    |    | 第4面 |     |     | 第4面   |    |    | 第5面  |    |    |    | 第4面 |    |    |    | 第4面 |
|           | 側板   | 底板 | 蓋板 | 側板  | 底板 | 蓋板 | 側板  | 底板  | 蓋板  | 側板    | 底板 | 蓋板 | 長側   | 短側 | 底板 | 蓋板 | 長側  | 短側 | 底板 | 蓋板 |     |
| サワラ       | 6    | 8  | 6  | 89  | 69 | 29 | 301 | 287 | 170 | 8     | 7  | 5  | 1    |    |    | 3  | 2   | 2  | 4  | 6  | 1   |
| スギ        |      | 1  |    | 7   | 11 | 10 | 41  | 42  | 24  |       |    |    | 5    | 5  | 5  | 3  | 14  | 16 | 12 | 5  | 1   |
| ヒノキ       |      |    |    | 4   | 11 | 2  | 27  | 24  | 15  | 1     | 1  |    |      | 1  |    |    | 7   | 7  | 5  | 2  |     |
| ネズコ       |      |    |    |     |    |    | 6   | 10  | 3   |       |    |    |      |    | 1  |    | 5   | 2  | 3  | 2  |     |
| アスナロ      |      |    |    | 2   |    |    | 2   | 8   | 5   |       |    |    |      |    |    |    |     |    | 2  |    |     |
| モミ属       |      |    |    |     | 2  |    |     |     | 2   |       |    |    | 1    | 2  | 1  | 1  | 3   | 3  | 2  | 1  | 19  |
| コウヤマキ     |      |    |    | 2   |    |    | 1   |     |     |       |    |    |      |    |    |    |     |    |    |    |     |
| マツ属複雑管束亜属 |      |    |    |     |    |    |     |     | 1   |       |    |    |      |    |    |    |     |    |    |    | 1   |
| アカマツ      |      |    |    |     |    |    |     |     |     |       |    |    | 1    |    |    |    | 1   | 1  | 1  | 1  |     |
| クリ        |      |    |    |     |    |    |     |     | 1   |       |    |    |      |    |    |    |     |    |    |    | 1   |

棺の部材 21 点のうち、95%がサワラであり、5%がスギであった（表 3）。第 5 面の円形木棺の部材 238 点のうち、78%がサワラであり、12%がスギ、7%がヒノキ、3%がその他の樹種であった。第 4 面の円形木棺・桶製骨蔵器の部材 992 点のうち、78%がサワラであり、11%がスギ、7%がヒノキ、4%がその他の樹種であった。第 6 面ではサワラが 9 割以上を占め、スギがわずかに出現するのに対し、第 5 面ではヒノキやその他の樹種が出現し、サワラ以外の樹種の占める比率が増加する。第 4 面では、サワラが優占し、スギ、ヒノキがこれに次ぐという傾向は変化しないが、ネズコ、マツ属複雑管束亜属、クリが出現するなど、その他の用材に多様性が増す。このように、第 6 面から第 4 面にかけて、サワラが多用されるが、時代が下るにつれて樹種の多様性が増した。

厚さは、各部材ともに、第 6 面から第 4 面にかけて、約 4 mm 薄くなった（図 14）。樹種別では、スギを除いて、検出面が上がるにつれて厚さが薄くなった（図 15）。

木取りは、円形木棺・桶製骨蔵器に使用されたスギ材

130 点では板目材が 83%（108 点）を占めるのに対し、スギ以外の材 1067 点では板目材は 41%（443 点）に過ぎず、目立った対比を見せた。

### 3. 方形木棺

方形木棺の側板（長側板・短側板）の用材は、61%が一致した（表 2）。一致したものは、スギ・スギが最も多く 43%を占め、ヒノキ・ヒノキが 18%でこれに次いだ。つぎに、長側板と底板の用材は、スギ・スギが最も多く 32%を占め、次いでヒノキ・ヒノキが 11%を占めた。長側板と短側板、また長側板と底板の用材樹種の一致率はいずれも 50%前後にとどまり、円形木棺・桶製骨蔵器と比較して樹種選択は厳密には行われていない。

第 6 面・第 5 面の方形木棺には、サワラをおもに用いる円形木棺と異なり、スギを中心に、ヒノキ、サワラ、モミ属、ネズコなどが用いられており、多様性に富む（表 3）。ひとつの遺構内での用材は概ね同一の樹種を用いているものが多いが、全体に明確な用材選択の傾向は見出せない。

## 考 察

### 1. 円形木棺と方形木棺の位置づけ

円形木棺・桶製骨蔵器は、おもにサワラで作られており、それ以外の材のみで製作されたものは稀であった。このような傾向は、ヒノキやキリのみを用いる将軍家・大名家の埋葬施設と同様、用材に関する何らかの規格が存在したことを推定させる。将軍家・大名家の棺と、一般都市住民層の棺とは、規模と同様、用材にも身分・階層差が存在した。

一方、一般都市住民層に用いられた方形木棺には、将軍家・大名家と同様にヒノキ製のものもあるが、スギやモミ属製のものもあり、全体として明確な規格は認められない。方形木棺が形態上の類似から櫃や長持、ないし箱の転用で

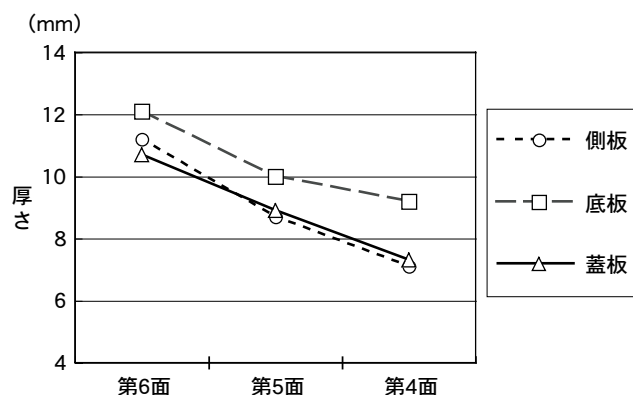


図 14 中央区八丁堀三丁目遺跡第2次調査地点出土円形木棺部材の厚さ。



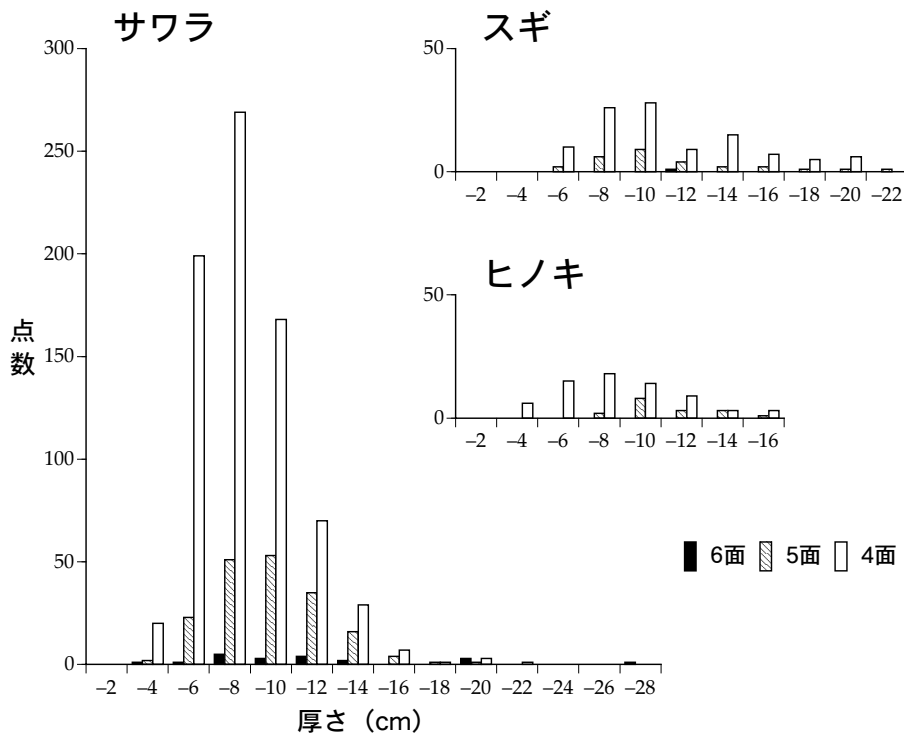


図 15 中央区八丁堀三丁目遺跡第 2 次調査地点出土円形木棺部材の樹種別厚さの分布。

あるとする見解（蔵持・鈴木，2003）や，17 世紀中葉に使用が途絶えるという現象（谷川，1996）と併せ考えると，規格に乏しい方形木棺は，身分・階層による生活の諸規定によって武士・百姓・町人の間に差別を設けた 17 世紀前半（児玉，1963）の社会に適さなくなったものであったと考えられる。また，厚手の 1 枚板を用いるなど消費される木材が質・量ともに大きく，森林資源枯渇の状況に対応できないこと，また埋葬時に必要とされる面積も大きいことなど，都市の過密化する墓域に適さないことも，方形木棺の使用が途絶える原因の一つとして考えられる。

## 2. 円形木棺材の供給源

円形木棺・桶製骨蔵器の用材とされた樹木の天然分布（林，1960；倉田，1971）を見ると，アカマツやクリが関東地方周辺をはじめとして全国に広く分布しているのに対し，ヒノキは木曾川・天竜川流域をはじめ東海・西日本・四国地方に分布し，またサワラや，ネズコ，アスナロは，天竜川流域にまとまった分布が見られるのを除けば，日光周辺から東北地方に散在するにとどまる。

植生史研究の成果によると，江戸城周辺域をはじめとして関東周辺ではマツ属を主体とした二次林または植栽林が近世を通して優占し，サワラやヒノキ，ネズコ，アスナロを大量に供給できるような森林は想定されていない。江戸市中の溜池遺跡周辺では，近世を通じてマツ属複雑管束亜

属を主体とした二次林あるいは植栽林が成立していたことが推定されている（吉川，1997；辻，1997）。板橋区高島平北遺跡では，中世から近世にかけて，優占していたスギが減少し，マツ属の占める割合が増加する（辻本，1995）。中野区北江古田遺跡の花粉分析結果は，上位の花粉帯ではマツ属とスギ属が増加する傾向が認められる（大井・辻，1987）。千葉県千葉市村田川流域（辻ほか，1983）や，群馬県館林市の池沼群（辻ほか，1986），埼玉県川口市赤山陣屋跡遺跡（辻，1989）の花粉分析結果も，12 世紀末から 18 世紀初頭にかけてマツが漸増し，18 世紀初頭から 1900 年頃にかけてマツ・スギ林が優占する植生が成立したことを示している（辻，1987）。

このように，現在の植生と古植生とを併せて検討した結果，遺跡から出土した木材のうち，多産したサワラをはじめとして，ヒノキやネズコ，アスナロといったヒノキ科の木材の供給源は，江戸周辺には求めにくい。現在の天然分布から考えると，天竜川流域または東北地方南部がもっとも可能性の高い地域である。

## 3. 林業文献史料研究との対比

文献史料にもとづく近世林業史研究（所，1970，1971，1973，1977，1980；Totman，1989）によると，近世初期の江戸周辺の木材利用は，以下ようになる。徳川家康による統一政権の確立後，城郭・城下町の建設や，交通・土

木事業などにより大量の木材需要が生じた。徳川家康は慶長5年、木曾山林と伊那山林を直轄地とし、直営的な伐木事業を手がけた。慶長年間には、河川改修事業などによって年産数百万挺のサワラやヒノキの<sup>く</sup>樽板が天竜川流域から採取された。家康は江戸城築城工事が終わる頃から出材担当者に木材の売買を免許し、木材の取引を行わせた。木曾山一帯の森林は、半分をヒノキが占め、あとの半分はサワラや、アスナロ、ネズコ、コウヤマキ、モミ、ツガ、マツ、スギ、クリなどから構成されていた。天竜川流域の伊那山では、サワラの樽木生産が中心とされ、屋根材・桶材として用いられた。そのため、寛永期(1624～1644年)には木曾で山林資源の衰退が認められ、寛文期(1661～1673年)には山林保護と伐木制限が強化された。木曾山、伊那山産出の樽は、素材の良木が払底した結果、形態が短小化し、小径木やサワラ以外の樹木からも生産されるようになる。18世紀に入ると、山林荒廃の結果、木曾山では、宝永5(1707)年にヒノキと、サワラ、アスナロ、コウヤマキの四木が停止木(後にネズコを加えて五木)として伐採を禁止された。

17世紀前半に、サワラ材が八丁堀三丁目遺跡の円形木棺・桶製骨蔵器に多用されていた事実は、家康入府以後の天竜川流域の開発によるサワラ・ヒノキ樽板の大量生産・江戸回送と、材木商による販売に合致する。また、その他の樹種も、木曾川・天竜川流域の樹種と一致する。これらの対応から、円形木棺材の供給源のひとつとして天竜川流域を考えても大きな誤りではないだろう。さらにこの時期には、結桶製作技術に大きな変化は認められない(石村, 1997; 小泉, 2000)ことから、17世紀前半における円形木棺・桶製骨蔵器の用材の厚さの低下や用材樹種の多様化は、江戸をはじめとした都市における木材需要の増大によって森林資源が枯渇し、江戸に移入される樽木が軽薄化・短小化した結果であると考えられる。この背景には、本遺跡で第6・5・4面の順に埋葬施設の密度が上がることに示されるように、17世紀前半における江戸の人口増加(大石, 2002)があろう。

一方、円形木棺用材のうちスギ材は、厚さも低下せず、板目材の割合が高く、天竜川流域に供給源が推定される他の樹種と異なって、江戸近郊の山から伐出されたと推定される。しかし高島平北遺跡における古環境復原(辻本, 1995)に見られるように、17世紀末にかけて江戸近郊のスギ天然林は減少したと考えられ、江戸の複数の遺跡(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1988, 1996; 高橋・橋本, 1995; 松葉, 1999; 能城, 1992; 能城・三村, 2003)で見られるように、用材の主流を占める程の生産力は持たなかったと考えられる。

18世紀の文献『和漢三才図会』(寺島, 1712)によると、

円形木棺の用材としては、スギを賞用し、サワラをその代替材としており、明治期の資料(農商務省山林局, 1912)でも早桶の用材としてスギが挙げられている。これらの記述はいずれもスギを中心としており、八丁堀三丁目遺跡で見られたようなサワラ中心の用材とは様相を異にする。この原因としては、江戸近郊においてスギの植林が18世紀にはじまること(松村, 1964; 加藤, 1982)と、18世紀における江戸地廻り経済の発達(伊藤, 1966)が円形木棺の用材に与えた影響を評価する必要がある。今後の資料の増加を待って検討したい。

#### 4. 八丁堀三丁目遺跡墓域内における身分差、階層差

谷川(1996)は、用いられる埋葬施設の種類と組成が変化することや、將軍墓と大名墓の構造が変化することから、17世紀後葉と18世紀前葉に江戸の墓の変遷における画期を認め、埋葬施設の構造と被葬者の身分・階層および寺院の格式・規模との相関関係は、これらの時期を通じて成立したとしている。いっぽう、17世紀前半を主体とする八丁堀三丁目遺跡の墓域内には、武士身分と、町人などの低い身分の被葬者が含まれていたと考えられるが、埋葬施設の大半を占めた円形木棺は、形態・樹種ともに均質であり、円形木棺に被葬者の身分差・階層差を見出すことはできない。したがって、これらの人々の埋葬施設には共通して円形木棺が使われることが多かった可能性が高い。また、円形木棺と方形木棺の用材差の原因を、被葬者の身分・階層の差異に求めることは難しい。むしろ、八丁堀三丁目遺跡の墓域は、江戸時代を通じて利用される円形木棺と、17世紀前半をもって使用が途絶える寝棺の方形木棺が同一の墓域に併存するという、身分制度確立の過渡期的様相を示していると考えられる。

#### 謝 辞

本研究を行うにあたり、谷川章雄団長、仲光克顕主任調査員、蔵持大輔調査員をはじめ中央区八丁堀三丁目遺跡調査会の諸氏には発掘調査時より多大なご助力を賜った。東京都中央区教育委員会には写真を借用させて頂いた。辻誠一郎先生、高橋龍三郎先生、早稲田大学考古学研究室の諸先生と大学院生諸氏にはご指導、ご助力を賜った。記して謝意を表する次第である。また、被葬者の方々に深謝し、ご冥福をお祈りしたい。

#### 引用文献

- 橋本真紀夫・辻本崇夫. 1990. テフラ分析・木製品の樹種・焼物の胎土分析. 『東叡山寛永寺護国院 I』, 349-368. 都立学校遺跡調査会, 東京.
- 八丁堀三丁目遺跡(第2次)調査会. 2003. 八丁堀三丁目遺

- 跡Ⅱ. 247 pp. 八丁堀三丁目遺跡（第2次）調査会，東京。
- 林 弥栄. 1960. 日本産針葉樹の分類と分布. 202 pp. 農林出版，東京。
- 石村真一. 1997. 桶・樽Ⅱ. 366 pp. 法政大学出版局，東京。
- 伊藤好一. 1966. 江戸地廻り経済の展開. 311 pp. 柏書房，東京。
- 加藤衛弘. 1982. 西川林業発生史に関する一考察. 徳川林政史研究所研究紀要 昭和56年度：165-196.
- 河越逸行. 1965. 掘り出された江戸時代. 224 pp. 丸善，東京。
- 児玉幸多. 1963. 身分と家族. 「岩波講座日本歴史10 近世2」. 225-271. 岩波書店，東京。
- 古泉 弘. 1987. 江戸の考古学. 136 pp. ニュー・サイエンス社，東京。
- 小泉和子，編. 2000. 桶と樽—脇役の日本史—. 459 pp. 法政大学出版局，東京。
- 蔵持大輔・鈴木伸哉. 2003. 埋葬施設の検討. 「八丁堀三丁目遺跡Ⅱ」. 237-241. 八丁堀三丁目遺跡（第2次）調査会，東京。
- 倉田 悟. 1971. 原色日本林業樹木図鑑，第3巻. 259 pp. 地球社，東京。
- 松葉礼子. 1999. 溜池遺跡・汐留遺跡・墨田区三遺跡から出土した木製品の樹種から類推される近世江戸城周辺の木材消費. 植生史研究7: 59-70.
- 松葉礼子. 2000. 浅草戸遺跡の弥生時代旧河道から出土した流木と近世の墓壇木棺の樹種同定. 「池子浅草戸遺跡（逗子市No. 100）発掘調査報告書」. 272-286. 東国歴史考古学研究所，鎌倉。
- 松村安一. 1964. 近世青梅林業の成立及び発展に関する歴史地理学的研究（抄録）. 東京学芸大学研究報告16集第9分冊：1-23.
- 能城修一. 1992. 新宿区細工町遺跡から出土した木製品の樹種. 「東京都新宿区細工町遺跡」. 174-187. 新宿区厚生部遺跡調査会，東京。
- 能城修一. 1995. 法光寺跡から出土した木製品の樹種. 「法光寺跡」. 25-26. 日本電信電話株式会社・新宿区法光寺跡調査団，東京。
- 能城修一・三村昌史. 2003. 新宿区行元寺跡より出土した木製品の樹種. 「東京都新宿区行元寺跡」. 262-270. 財団法人生涯学習財団・新宿歴史博物館埋蔵文化課，東京。
- 農商務省山林局，編. 1912（復刻版，2000）. 木材ノ工藝的利用（2）. 「明治後期産業発達史資料 第508巻」. 269-733. 龍溪書舎，東京。
- 大井信夫・辻 誠一郎. 1987. 北江古田遺跡の後期更新世以降の花粉学. 「北江古田遺跡発掘調査報告書」. 434-465. 東京都中野区・北江古田遺跡調査会，東京。
- 大石 学. 2002. 首都江戸の誕生. 263 pp. 角川書店，東京。
- バリノ・サーヴェイ株式会社. 1988. 木製品の樹種同定. 「東京都千代田区紀尾井町遺跡調査報告書（本文編）」. 524-534. 千代田区紀尾井町遺跡調査会，東京。
- バリノ・サーヴェイ株式会社. 1996. 木桶・井戸・地下式坑構築材の用材選択・変遷. 「汐留遺跡」. 165-175. 汐留地区遺跡調査会，東京。
- 鈴木 尚. 1985. 骨は語る徳川将軍・大名家の人びと. 221 pp. 東京大学出版会，東京。
- 鈴木 尚・矢島恭介・山辺知行. 1967. 増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体. 438 pp. 東京大学出版会，東京。
- 鈴木正貴. 1988. 増上寺子院群出土の早桶について. 「村上徹君追悼論文集」. 147-150. 村上徹君追悼論文集編集委員会，東京。
- 鈴木正貴. 2000. 井戸桶と早桶. 「桶と樽—脇役の日本史—」. 208-226. 法政大学出版局，東京。
- 鈴木伸哉. 2003. 八丁堀三丁目遺跡（第2次）出土木棺・卒塔婆の樹種. 「八丁堀三丁目遺跡Ⅱ」. 217-219. 八丁堀三丁目遺跡（第2次）調査会，東京。
- 田口哲也. 2001. 近世墓の基礎研究—円形木棺の法量研究—. 博望2: 163-179.
- 田口哲也. 2002. 近世墓の基礎研究—円形木棺の法量研究2—. 博望3: 74-100.
- 高橋 敦・橋本真紀夫. 1995. 遺構構築材料の同定. 「飯田町遺跡」. 467-480. 飯田町遺跡調査会，東京。
- 高山 優. 1993. 江戸の埋葬施設. 「近世江戸の葬制と墓制 第47回日本人類学会・日本民族学会連合大会プログラム・研究発表抄録」. 28.
- 竹内修二. 1993. 人骨と埋葬事例2 天徳寺の事例から. 「近世江戸の葬制と墓制 第47回日本人類学会・日本民族学会連合大会プログラム・研究発表抄録」. 27.
- 谷川章雄. 1987. 自證院遺跡における墓標と埋葬施設. 「自證院遺跡」. 188-194. 東京都新宿区教育委員会，東京。
- 谷川章雄. 1990. 江戸の墓地と都市空間. 文化財の保護22: 140-152.
- 谷川章雄. 1991. 江戸の墓地の発掘—身分・階層の表徴としての墓—. 「甦る江戸」. 79-111. 新人物往来社，東京。
- 谷川章雄. 1996. 江戸の墓の埋葬施設と副葬品. 「江戸時代の墓と葬制 江戸遺跡研究会第9回大会発表要旨」. 125-140.
- 寺島良安. 1712（島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳，訳注. 1990）. 和漢三才図会15. 東洋文庫516. 平凡社，東京。
- 所 三男. 1970. 採取林業から育成林業への過程. 研究紀要／徳川林政史研究所 昭和44年度：5-26.
- 所 三男. 1971. 近世初期の商人による用材生産. 研究紀要／徳川林政史研究所 昭和45年度：1-22.
- 所 三男. 1973. 裏木曾山の用材生産. 研究紀要／徳川林政史研究所 昭和47年度：1-29.
- 所 三男. 1977. 江戸幕府初期の営林事業. 徳川林政史研究所研究紀要 昭和51年度：1-36.
- 所 三男. 1980. 近世林業史の研究. 858 pp. 吉川弘文館，東京。
- Totman, Conrad. 1989. The Green Archipelago, Forestry in Preindustrial Japan. 297 pp. University of California Press, Berkeley.
- 東京都中央区教育委員会，編. 1988. 八丁堀三丁目遺跡. 154 pp. 長岡不動産株式会社・東京都中央区教育委員会，東京。
- 辻 誠一郎. 1987. 最終間氷期以降の植生史と変化様式—将来予測に向けて. 「百年・千年・万年後の日本の自然と人類—第四紀研究にもとづく将来予測—」. 157-183. 古今書院，東京。
- 辻 誠一郎. 1989. 開析谷の遺跡とそれをとりまく古環境復原：関東平野中央部の川口市赤山陣屋跡遺跡における完新世の古環境. 第四紀研究27: 331-356.
- 辻 誠一郎. 1997. 植生史からみた赤坂溜池界隈の環境史. 「溜

- 池遺跡 第II分冊, 155-159. 帝都高速度交通営団, 東京.
- 辻 誠一郎・南木睦彦・小池裕子. 1983. 縄文時代以降の植生変化と農耕—村田川流域を例として—. 第四紀研究 22: 251-266.
- 辻 誠一郎・南木睦彦・小杉正人. 1986. 館林の池沼群と環境の変遷史. 「文化財総合調査 茂林寺沼及び低地湿原調査報告書 第2集」, 7-110. 館林市教育委員会, 館林.
- 辻本裕也. 1995. 植物化石からみた古植生・古環境. 「高島平北」, 49-106. 都立学校遺跡調査会, 東京.
- 植田弥生. 2002a. 樹種. 「池上本門寺近世大名墓所の調査」, 225-239. 池上本門寺奉賛会, 東京.
- 植田弥生. 2002b. IV 面墓出土木製品の樹種同定. 「桑名城下町遺跡発掘調査報告書 荳町 93 (法盛寺) 地点」, 46-56. 桑名市教育委員会, 桑名.
- 植田弥生. 2003. 東京駅八重洲北口遺跡出土木キリシタン墓木棺の樹種同定. 「東京都千代田区八重洲北口遺跡」, 799-801. 千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会, 東京.
- 吉川昌伸. 1997. 溜池遺跡の花粉化石群. 「溜池遺跡 第II分冊」, 83-117. 帝都高速度交通営団, 東京.
- (2004年5月26日受理)

書 評: アーネスト・ギフォード・エイドリアン・フォスター (長谷部光泰・鈴木 武・植田邦彦, 監訳). 2002. 維管束植物の形態と進化. 原著第3版. 643 pp. ISBN 4-8299-2160-9. 文一総合出版, 東京. 価格 9240 円 (税込)

日本は書に恵まれた国である。世界でもこれだけ多種多様な翻訳書が刊行されている国はそう見当たらないのではないだろうか。本書は、そのような環境の中でさえ、よく出版に踏み切ったといえるような、おそらく出版社にとっては大変な決断を迫られたであろう書である。もちろん、この英断は大いに評価すべきものとなった。

本書は、永く植物形態学のバイブルとしてひもとかれてきた英語版の名著, *Morphology and Evolution of Vascular Plants* (E. M. Gifford & A. S. Foster. 1989. Freeman and Company, New York) 第3版の完全日本語訳である。初版の Foster & Gifford. 1959. *Comparative Morphology of Vascular Plants* (維管束植物の比較形態学) 以来, K. Esau の *Anatomy of Vascular Plants* (2nd ed., 1977. Wiley, New York) や D. W. Bierhorst の *Morphology of Vascular Plants* (1971. Macmillan, New York) などとあわせて、20 世紀後半の植物形態学者必携の書であった。解剖図を含む豊富な図版を駆使して、維管束植物の進化史に即しながら、大分類群から小さな分類群へと段階的に書き進められており、維管束植物とはどのような生物たちから成り立っているのか、その形態と進化がどこまで明らかにされているのかが、とても分かりやすくまとめられている。第2版までは、表題に「進化」はなかった。表題の変化は、形態学が進化研究に不可欠であること、その生物学的な面白さを訴える時代になったことの象徴でもある。第2版 (1974) と大きく異なることは、分子系統解析にまつわる話題が随所に盛り込まれていることである。分子情報の急速な集積が、形態と進化研究にどう反映されるのかを、生物学の重要な変換点であった 20 世紀末の時点で解説することには十分な意義があった。

生物の進化は、分子情報をほぼ自在に扱うことができるようになりはじめた 1980 年代後半までは、主に形態学に基づいてその解明がはかられてきた。形こそが、生物の歴史と生き様を明らかにするための原初情報で、有力な手が

かりの一つだからである。このことは、形態進化と遺伝子進化とを結びつけて議論することが可能になった現在でも基本的に受け継がれている理念である。解剖学を知らなければ医者ができないのと同じように、形態学は多くの生物学者にとっての素養である。にもかかわらず、形態学を高等研究機関で教育することは、非常に難しくなりつつある。従来の形態学だけでは、大学などの研究室を確保することは難しい。この点を補うには、形態学の素養を身につけた、先端分野の研究者を養成するか、生物学を志向する学生が、自主的に素養を身につけるしかない。欧米でも事情は似てきているが、本書のような良書が改訂され続けて出版されていることは、形態学教育が彼の地ではまだ軽視されていない現れでもある。だからこそ、情報が急速に入れ替わる現代においてさえ、原著の出版から 13 年経てもなお本書が訳出されるべき意義があったのである。

本書の果敢なる訳者たちは、先に挙げた「素養を身につけた先端分野の研究者」である。将来の植物学 (あるいは生物学) の展開を見据えながら、ときには訳出に苦勞する形態学の用語にも注意をはらいつつ、日本語版を上梓している。このため巻末には、訳者注のほか、訳出時における維管束植物の系統図 (もちろん分子情報、化石情報を加味してある) や、日本語で読める本も含めた参考図書などが添えられており、この分野の理解をできるだけ広めたいという親切な意思がうかがえる。

第1章は、まず植物形態学を科学的に位置づけることから始まる。ここで触れられているように、本書では化石記録を非常に重視している。全体を通じて、化石植物と絶滅分類群の記述に著者が多くのページを割いていることは、決して評者の身びいきではなく、本書の内容を際立たせており、形態と進化を広い視野で理解してもらうのに大いに役立っている。第2章以降の各分類群の記述では、形態、生殖、発生という定番の記述だけでなく、必要に応じて研究史や、生態、分類地理、分子、さまざまな問題点などにも触れら